寛永諸家譜

藤原氏癸廿五冊之内十五

支流

128

内閣文庫
番號 和 20199
冊數 186(128)
函號 緯 76 1

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

内田　坪内

村越　村瀬

寛永諸家系圖傳

藤原氏　　癸十五

支流

内田

正利

勝間田遠江

累世勝間田伯

浅草文庫

正元

新八郎　後遁江戸

叙列半蔵ト位ト

今川義元の妹ニ聟ハ岡田ヲ以

久良来後列世系ト称シ

岡田ヲ位ハ少ク雖トモ

ハ岡田ト称義元氏真父子

没落の後列清書ヲ

正成

新六郎

天正之ト称義元父子ハ

清和ヲ

大権現ヲ場ヲ晩年

東照大権現ヲ場ヲ

天正四年叙列田原ト

蒙六十俵　法名胡永

落髮しく松屋と号し八十余歳
にして死す

正次

二太郎　新六郎
永禄七年十八歳の時
大樹現下洛しまつる
二十日歳乃ときに
勅命をもて金の孫
と号し
尾州小牧陣に高名を顕す

慶長十一年後別をもとめ六十歳
にして死す　法名宗清居士

正世

新次郎　年五歳の時
文禄二年
台徳院殿に拝謁し
初軍家に仕へまつる
寛永十四年又十九歳にして死す

法名 良英

二信

信立信下　信濃守　初八幡次郎人

元和七年

初軍家より賜しまつる

寛永十七年十一月下旬の比小見川

伊豆守殿小性組の番頭と移り

正友

動兵衛尉

寛永七年

初軍家より賜しまつる

同十四年　台命をもつて父二世の

家督を継ぐ

家紋　丸の内に木瓜

国立公文書館
National Archives of Japan

内田

定右

小大夫　生国甲斐　法名宗園

武田信玄なるべし　猪鼻城主

天正十年

東照大権現甲州御入国の時御

帰参いたさせ　仰付られ

甲州先方の流として芦田流
くつへしむべしとかたらひて
定右衛門の数日あるより吉田
ちかくあひしらふこのとき小隙
氏重甲州へあ百あるく甲斐信濃
両国の境に
絶えたるとなり芦田流と
山小屋の構ふ里ていふ飢渇
数日のうち

大檜現氏重と和睦あるくより甲府
へ引入り
大檜現へ猶しばらくまかりあり
諸威の軍来地をたまふ
そは 作をかへ山小屋のたくみ
こころ兵信州へいたり 諏訪の城と
うもうの定言をおのおのの
おのおの諏訪の城番をつとむ
信州松本の小笠原信濃守下諏訪

かく敵度相我し沼田の城をせしに
とゝも立番乃兵城をまもりに
事いよ〳〵かさゝ人信濃をつる
り海津に

天正十二年長久手合戦乃ゝき
沼田城番の輩相議して内藤
七郎兵衛と陣所
佐渡守大久保治部太輔
大権現よりとして沼田城番

乃ゝ長久手の
きこゆ長久手
このとき 作ゝ沼田城を
とゝも大功
長久手来る事なり
城番とゝ事を
七年ゝ吉田陣と
ゝ
日十八ゝ小田原陣ゝ

大樹現の御のぶのものなどわるい
いもどりうしわくべき旨の事以
外もいけどる事　あるいはてしたのび
のものとうらとりの首級を敵
奪ものの奥列陣ひとさる
台徳院殿　仕手　字幼宮のいる
板中山道清進發ひとさと又志
びくまもれ　仕手　伏見
又大坂

日十八日　甲州ひとびく　本多弾正
　　石役　沙汰　在陣
日十九日　大坂清陣のとき　三列
　　器清　　
大樹現　清　　
戸田左近守　　
　　清　　
　　仕手

右次

八無情尉　生國同前　法名孝林

白川院殿の御家人にまいらせ

定次

八無尉　生國武蔵

元和二年

大権現駿府の御

白川院殿にまいらせ里甲府

城番をいたしむ

同日に後河大納言忠長卿の御

寛永十六年ゆるされ

扶軍家にまいる

家紋　九の内の稲三本雀三

国立公文書館
National Archives of Japan

四四

●栗

義人　生国武蔵

織田信長

三弘

勅右京亮

東照大権現
台徳院殿
将軍 家康公御誕生
寛永十四年六月廿四日

弘綱
[illegible]
寛永十二年三月
将軍 家光公御誕生

日十二年大御番[illegible]

家紋 九曜張替三葵

国立公文書館
National Archives of Japan

内田

在信

甚又郎　生国三河

東照大権現ニ

又十四歳ニ

て死亡　法名宗甲

信義

甚太郎　生母同お

大樹様より仰せ付られ

[illegible]土蔵乃書と成とも

元和八年三月八十六歳にて死去

法名法雲

信利

甚太郎　生母同前

大樹様より仰せ付られ又信義に

かわらず仰せ付られ書と成とも

名古屋殿より仰せ付られ又

將軍家より仰せ付られ天守

代書と成とも

家紋　三鄰

国立公文書館
National Archives of Japan

●菜

伴国

藤加茂の神　加別富樫より生ずる処

初富樫を号くるなり

尾州より也　大山の城主織田

伯耆守信長英雄の国松倉

乃城より信長のとき富樫とあり

と称し伴内と称し

栗

対馬守　拾万石

勝定

後七郎　後玄蕃と号し

慶長十二年　三月十日　九十四歳

法名玄秋

栗

前陸奥守　後大徳寺　但馬守

純家と号し

豊臣秀吉に属し

任官

利定

喜太郎　後玄蕃と号し

永禄三年織田信長今川義元と合
戦のゝち利宣桶狭間にて
軍功ともげ首一級と獲う
信長東濃より進發のとき利宣が
居城松倉城を東濃の境にうつし
波阜とせんことを信長に松倉
の城をうしなひ利宣と案内者として
秀吉利宣がうる所無と
く東濃国稲沼の色何年成とも
をひくとも信長秀吉
命し稲沼の城を大澤次郎左衛門
として守方にうつし大沢郎
引せども志のゝ如ず秀吉とゝ
先ゝ人質とし志ゝれども信長
乃ゝ命を受稲一大澤次郎信長
家臣となり東濃の地と稲沼
数度の忠節ゝ
と感賞に

四十年信長江州其他の城をせしめ
ゆきて利家蒲生氏郷と一番の城と
こえ城中へ入れりその名先
鑓の帳ふたつを
信長越前平尾山へ敵のとき利家
軍功をもげ首一級を得
信長江州小谷の城へ敵の時利家先
へ進へ欲を城中へ追入た刀敵
一ケ所とかへ首一級を得

信長江州横山の城をせしめ利家
自分鉄炮をけふち軍功をもげ
信長大坂合戦のとき利家播磨へ
へへ欲へ鉄炮をもち
てあひまの家へ欲文を傳へ
鉄炮をもち利家ゑ鬼ヶ一の
鬼畜してやまとの欲へ
みを見ると利家これをもの首

を得て
信長秀吉を
ひきつれ播州三木の城と
ひこ[illegible]ものを利定伊賀甲賀の
鉄炮同心百人雑賀又十郎が組の平
伊賀のもの百人根来の衆十人利定
自分の鉄炮七十挺新て二百八十挺と
もかく秀吉一番に舟の城丸
をもしき鉄炮とけるち軍功ともゝ
まるこのときさ中村孫平次馬廻とそ
くさうを秀吉と孫平次が軍功と
してこれを廣長一金げんの乃刀
孫兵と孫平次又同心鉄
炮ものもの白鞘をあたふ
秀吉聖同利定が功あるゝ多
く祖父江仙子代 後三山石見と号に
一柳市助 後伊豆と号を
利定に告くいまゝ那日の軍功今日
きとげけるゝ御れば同心衆とかう

ものの有ひたる我所ちうの給と
きゝ掛条をもつべきとの使者を發し
をくるといへども利宣あつく兼引
せばうをみかをひく信長ちうを
引とるべきの旨あるを秀吉はゆきき
利宣をもて厳せらるべしと利宣
づ兄お師播磨をもつてのよし
と告ゝれば利宣きゝてもれら伊賀
乃志のびれもの人と安藤伯耆利

が陣中へいりをる入小屋とやうをして
のあひだをうち秀吉引ちがへられ
ふまりて利宣が軍伊と威勇とをれ
ゆをも秀吉ふ屋せびして信忠ふ
天正十年信長甲州出陣の時利宣
をうびりをる源太郎家宣とともに
信忠ゝ屋ひて信忠言を城とせゝ
ゝ利宣誘殺の者どもとして敵と
形くうゝ本城ゑせゆ入利宣

目方鉄炮を持て欲二人と申
其間一人も関か平沢のぞみ
もこと申あふ一人どうもそに
にれのもの又と申て欲此首と
申ものの切とほめく感状と
たまふもの紀州いたく
今度北信州高坂首一宛
被撃取作申感入作る鉄炮と
手柄に成名誉同作由申作

泉忠節所要作る願たる事
馬張る中付作昌年岡也急度の
被遣者仍如件

五月十　信忠

三月又日
伴内新左衛門
伴内源左衛門
高坂弾正忠の後信忠流浪する事
時に信長へ穴山へ献る法の黒

葦毛の馬をうじゐる武器厩所持の
孫答と利宗をみうちのうの侍を
ひきうく枚殺忠節あるのゆゑ二千
八十七貫の領地をたまふ
秀吉尾州敵向のとき利宗と秀吉
不和なりゆゑ森武蔵守長一
り屬し一処にてうく鉄炮と
もに軍功をとげまた秀吉これ
をうけゆるすと長一ふ長一

たちまち利宗が姓名を改めて菅
秀吉を利宗と申すべきとて赤飯をまゐらせ
て利宗をうけたまはり武
金銭の時長一討死をとげ
長一が軍兵をうけ取敬を歓急
ひきうけと追利宗をうけ取
時白檀の槍と長毛乃棒
乃長柄をうけ歓士一人をみ

来る利定百匁ほどの鉄炮を持ち
候ものと数ところのいさの軍勢迄
天正十八年ゟ
東照大権現様ゟ拝領
三河の国山口村ゟ百石武州
伊豆国賀茂郡ゟ百石駿河
三河の国藤郷桂村大寺村高根
村ゟ百石と合
四百石なり

慶長八年
大権現様尾張御伝代の時利定
ゟ召し出され息男四人御奉公
小姓いたす
同年関東御の内き利定鉄炮の
者ゟ十人と組り濃州赤坂
ゟ召し井伊兵部少輔殿御組
ゟ尾張利定息男四人ゟ
者一組ゟ大下一統の内

濃州牟地の内ふるく書給ひ
里と称ず
同十八年二月十三日七十二歳にて
死す　法名正安

義宣
長政の子
定時
太郎
守宣

義人

守定
源太郎　忠兵衛尉　後玄蕃と号す
信忠甲州を傳ひ給ふ信忠ゑ
紙をさるとくに見あわせ宣
給ふ
信忠信州高遠の城をせめ
とき信忠ゑ為ひ給ふ家定ハ

大よあの里て歌の首を知信忠り
歌を見ちさきて山口小弁色又
歌の首と沿しく信忠り歌を信忠
のいしく小弁が首ととの場は旗
下りち
場を見なるゆへ拾まる事
小弁みとくちれ家定首と海られ
と拾ふ事い小弁りさきなり明
ゆへ家定とりしく一番と

信忠ち威状を文ましたまふ威状
ち利定ゞ結めあるれ信長色
亦こ物を威ふ頂一沿丸くし
典厩沿拾の第成家定ふなる
此ゆこさ家定十八歳なり
織田信雄の敵元滝川三郎兵衛
雄利 後羽柴下総守 勢列書賀沿
ま新場のとき家定親族ふ
ふちちと沿しく二九樽と

鉄炮一挺とりかく歟数人
とうち殺しその中に澁川が家人
畏て長左衛門と城戸とひら
かしめ家定うちとりく歟多
を射たおすのち又長刀ふるひ歟一人を
殺す看と澁川が家人田三橋左衛
とうてうちとれを折しめ引退く
城戸と同樽に入鉄炮とりて
歟をうちく歟を攻入るを

て澁川自殺せんかゝ家定を射し
く魔旋の中をこのむ家定辞
退とうち手を三なり拙れしかを
澁川志ゆく殺しうち家定うれと
うけとる樽の傍ゆ出るしを
立とさうり歟うれ尺く投魔
旋とゆんとやおひ久人急く攻也
且金瑤と入樽は海下とうりくを
家定陸とうりくを防を時

澁川が家人関孫右衛門を赤地城
をかこむ敵を突たおしたり
れども宮内殿鉄炮をうつ
敵をうち討敵もづさて鉄炮城
奪んとせしに孫右衛門が先手
れども城の石突とをうつ敵兵
を突たおしけ国城をもちこもる
して和睦し城を明澁川小田原
深田の内りでよりて討寄古

の兵を囲む家宣守て出ず
北ゑりかこむとゝの敵陣を
焼くり城中へ入ゝ敵兵引
去りぬ

天正十二年長久手合戦の内
大権現信雄卿先くの方に小牧
の内迫間小折の内に生弱八右衛
門尉を小折の内に生弱八右衛
門尉を橋を右三郎これを中
木曽川筋を堅固に防ぐ迫間

多少しくの業因を志新屋し
まさに八右衛門の家宝が舅なる都宝
をもつくが勝とをなんぢきこなる
高もち小牧山をとして牧野
半右衛門と養者ゆして
大権現より賜はりたまふ形
乃和木をもむき志のびの者
三人とうちより
小田原陣はせ参る命う

もち制法をさだめんぐこと先ず
前世猪右衛門家宝奥刀
うれもむくの水ことが奉ぎ
奥刀もち地方家ぎ奉ぎ人安
積門なしくは法をみぶ
家宝を強ひ盗の跡をいたか
ひぐ地人を一撫にして百人幾ばくして
家宝が家人と却はと奪
取らくうち家宝とかも家宝

一人相戒一揆の大将一人を生捕
人質にとりさきに奪ひ為わと
云人一志うも大ゐ七人を殺り
志くに負列りいるる
父孫子中朝鮮陣の小さき要害
秀吉より岩とくく先手
寄人のびり細父の後加藤清正
より朝鮮ひさ谷山浦と
せもれ先年ようて知九

の里入甲士ようようのから朝鮮
陣中りをひく甲士の首之と
ゐさ里ようから斬りもの紙
形り家宝矢底石底四ケ石を
明ける
慶長六年関原陣れこと家宝
鉤命をひ丹伊豆改組
原一首一級と切る
同十九年元和元年大坂清陣の

世子家定兄弟三人をひき
息男等鉄炮又十挺をもつて
大樹現れ麾下をさびせる

安定

太郎兵衛尉
関原陣のとき井伊直政が組
屬一太刀疵ありて首一級を
ひろう

定吉

かち兵衛尉
関原陣の世子井伊直政が組
屬一首一級をひろう

正宣

作左衛尉
関原陣へ世子太刀疵をう
ひ首一ツを得る

宣右

十二郎　坂倉[illegible]

秀宣

又郎左衛門尉　生岡英法

慶長九年

台徳院殿[illegible]

[illegible]

[illegible]

同十九年大坂陣乃[illegible]

台徳院殿[illegible]

台命[illegible]

[illegible]

[illegible]

友宣

清九郎

宣信

山三郎　武州江戸より出る

寛永三乙卯六月

将軍家より渡し給はる

日十二年　大法番を勤む

伊宣

久四郎

行宣

久右衛門

定仍

喜右衛門　後如無斎と号す

慶長六年　本田正野仕西尾隠岐守

が養者となる

大權現様に御渡

関東御下向御正法と成

奉とゝむ

同十六年

大樹現淀川へ渡り出き又

家宣殿より

書あり出り明ら此人数宣仍家宣

御覧の所の同人数十人とひきひく

仕事也

大樹現豊臣秀頼と二條城へ渡り

をひく渡り西れとき本多正純及

渡り毛義又ふるひ宣仍大久

渡門を警衛

慶長十九年元和元年大坂表陣

乃とき家宣とゝ行ゐ

大樹現御供奉

寛永六年右井大炊頭利勝

台徳院殿へ元上一たくまつり

也兵衛をあつくゝ玄蕃と長

長太郎をあつくゝ也兵衛と

号仕

宣次

半三郎

慶長十又年

台徳院殿ゟ渡し給ふ

同十六年より御小姓組の番を勤

同十九年、元和元年大坂表乃

御陣ゟ御供仕

将軍家ゟ御感状

ゟ大押の役を仕る

宣吉

主太郎

寛永六年

台徳院殿ゟ拝し給ふ

寛永十年御歩行ゟ御小姓

組ゟ中務ゟ召しくゝ百石乃

食邑を賜ふ

宣長
牧馬
寛永六年
石清院殿を祥し
宣賢
勘解由
宣昌
木工助
宣良
求助
宣房
太馬助
宣行
義人
家攻 郷

国立公文書館
National Archives of Japan

光

村越

七郎左衛門　中間三河　法名乃真

清康君　廣忠卿　よりまつ様

東照大權現よりつくまつる

光

兵庫允

寛永六年関東陣ニ

大権現ヨリ仰付シ藤堂和泉守高虎ヨ

リ九月十六日ヨリ戦死ス

三童

七郎兵衛

光好

兵庫允ニ成

源四郎ヨリ

光好

権右衛門

寛永六年十二月廿八日

台徳院殿ヨリ被召

御軍家ヨリ

国立公文書館
National Archives of Japan

三直

指左巻尉

初軍家ゆ仕へ奉る

女子

長濟泳左巻が妻

家紋　鳩酸草

村越

後右

太郎左衛門　生国之河

酒井内匠ヶ浦より

後信

次郎　生国同前

東照大権現より

直右

茂妙　生母同前

三蒙のゆゑ父とうなるゆゑ

後信ことを粮育ほうあり

大樹様よりくくもうけ

右膳

清次郎　成別伝足ようまち

家紋

丸の内橘酸草

国立公文書館
National Archives of Japan

村越

延久

義房 尉 生国甲斐

年号宣旨改ル

死去 法名志清

六十七歳

延時

筑紫兵庫尉　生國同前

はじめは菅沼小大膳よつて

慶長七〇小大膳死しこのちめさ

まつて

東照大権現よりくさまつの武列

恐の法城寺を授たもう

享二年ゆへ　法名月清

延連

市郎兵衛尉　生國武蔵

慶長十八年父延時の跡をつぎ

恐れ法城寺をたもう

寛永十七年めされ沼田より作し

法華経九番をたもう

家紋　九代目鳩酸草

国立公文書館
National Archives of Japan

村瀬

本名磯貞と称し重治と云て

村瀬と称すむ

重久

六太夫尉　生国尾張　法名弾正

織田信長に仕ふ

重治

左馬助　後入佐下　初い重也と号し

生母同前

少年より織田信雄よりゝ舊姓と

あゝ〳〵あゝ〳〵材彫氏と云ふ日ゝ石

ゝ食邑と給ひ　上三千石の高力とあゞ

ゝ

慶長八年正月京師　漆板のごと

信雄なゝびゝ秀雄より星合家女

奥泰と重治と両使とゝ〳〵関東

ゝ下ひ言伝を

大橋明

台徳院殿の通ゝ〳〵ゝ両使

らでゝ相列小田原ゝいゝとき

正方ゝより花御前来して石田三成

漆板をゝゝゝ正方及び孔子

このとき重治奥泰と相議して

いまく汝をこれ正法して信雄
を若槻別大野よりともむき軍
交と謀をし重治を関東よりも
使のをもむきと達をきき所
ちくしとしく具奉ハ大坂より
信雄と相ちてかの別よりも重治
を野別小山之助交よりともむき
大樹現
白洲院殿とあしこまり信雄

父よりの使節の旨と云上
大樹現大ゝ御威ありてまれもち
はいとはなしまゝ治陽りかへる
こしとき水野日向守三方対面ゝ
居と重治日向をゝ而りいる重軍
謀とあるせ相ともゝ濃別よりもむき
大垣の城とかこむもとこそ七月ゝ日
明ゝ日十八日我軍競攻ゝ歌兵
引くゝ城ゝ入重治ゝ

軍忠をもとげまたてのち重治日向守
りさきうち別に大法よりも
大檜現とあしうこまりこと
かうじけれども 鈎命とかりく
魔下りに屬して
大檜現城外伏見より長沙に重治が
嗣子清孫重治もまた
大檜現に渡しつかる 作り
いまくと度汝が父重治が軍忠

他に異とれゆへ 俸知三千石とさ
くに汝母が而りいさ里てもくこれ由
と若べしとかりとひく重次
食邑拜領れ清書と頂戴と
同十九年 作とかりかれ侍番
なり
元和元年大坂表陣に従事とつも
りのときに日向守大和口に居と重治
大檜現れ清使として中山勘解由と

於ぐく六月六日日向守ゟ伊ゟ
日蓮宗と 麿下ゟ通ど 日吉先
鋒と形り陣中りあるべけ
めぐ分
同六年
名徳院殿の御と水戸中納言
形房卿ゟ屬し 鎌倉一番石とくゝ
ゝ陣ゝ
寛永十年四月二十日り死去

七十八家 法名言唯

重次

清義 生國山城 母八木甚兵衛ゟ女
寛永六年 重次六家のとき城列
伏見りとゝく
大稽現とゝしゝ
同十年
名徳院殿ゟけくゝ

同十六年　作と申す者より大久保右京亮
永井信濃守に属して御小性組の
番を勤む
同十八年　水野監物が組に属し
大阪夏陣の御供仕り働きを遂ぐ
元和二年　根来を攻む
同三年　御入洛の供奉を仕る
その後毎度御供仕る
同九年　九月十日死去

同六年　井上正就が組に属し
寛永七年　番頭和田重政が組に
属し御番を仕る
同九年
将軍家より黄金五十枚を賜る
同年　作と申す者より松平伊豆守信綱が
組に属し御小性組に番を仕る
同十年　太田備中守資宗が組に

[illegible]
日本多英俱伯が組ノ属し
書院番となり知行地となる
日十七日本多義俱守が組ノ属し
後別の出城番となり豊年ニ
[illegible]

女子
母松平
女子

重政
母同お
小三郎　生岡山城　母八西尾[illegible]女
大検視となり[illegible]
台徳院殿
将軍家ノ[illegible]

家紋　九曜巴

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan